

「よりよい社会を形成していく生き方を創りつづける社会科学習」 (第2年次)

～よりよい社会を形成していく生き方を創りつづける社会科学習を構築するための「学習活動の工夫」～

北社研主題推進委員会

1 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

東京五輪を2年後に控えた現代社会は、グローバル化の進展や人工知能の飛躍的な進化など、社会の加速度的な変化が大きく、将来の予測が難しくなっている。そのような状況の中、予測できない未来に対応するためには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会を自ら創り出していくことが必要である。また、どんなに困難な状況の中でも、私達が過去から受け継いできた日本人としてのよさを生かしつつ、創造力豊かに克服・改善の方法を生み出すことで、よりよい社会が実現されていくと考える。

(2) 教育の動向から

平成29年3月に告示された新小学校学習指導要領においては、育成を目指す資質・能力を、ア知識・技能、イ思考力・判断力・表現力等、ウ学びに向かう力・人間性等の三つの柱で整理し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められている。

社会科においても、上述した三つの柱にそって目標が整理された。また、内容については、①地理的環境と人々の生活、②歴史と人々の生活、③現代社会の仕組みや働きと人々の生活に区分する観点から整理するとともに、第3学年及び第4学年の目標と内容が分けて示された。

これらのことにより、知識や思考力等を基盤として社会の在り方や人間としての生き方について選択・判断する力、自国の動向とグローバルな動向を横断的・相互的に捉えて現代的な諸課題を歴史的に考察する力、持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度など、国家及び社会の形成者として必要な資質・能力を育てていくことが求められている。

(3) 子どもたちの実態から

平成28年2月の中央教育審議会答申では、現在の子どもの、判断の根拠や理由を明確に示しながら自分の考えを述べたり、説明したりすることについて課題が示されている。また、学ぶことの楽しさや自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながるという意識がもっているかどうかという点において、国際的に低い意識が見られていることも指摘されている。さらに、SNSがもととなる事件の増加や子どもの貧困問題など現代社会における子どもを取り巻く状況は、厳しさを増していつている。

このような状況の中、今を生きる子どもにとって、学校での教育が現実の社会との関わりやつながりを意識し、よりよい社会の実現に向けた資質・能力を育むための場、即ち未来に向けての準備段階の場であることが求められている。

(4) 研究の歩みから

これまで県社研の歩みでは、「生き方を創りつづける」ということが研究の重要な柱として貫かれてきた。「生き方を創りつづける」とは、教材に登場する人間の生きる姿を自分との関わりから見つめ、社会の中で共に生きることについて考えを巡らすことと捉える。また、北社研でも、北九州市の環境の取組等、人間の営みや働きに焦点を当て、よりよい社会の実現に向けた北九州市らしい教材開発を実施してきた。そこで、これまでの研究を踏まえ、「よりよい社会の形成に主体的に参画していく資質・能力を育てること」を目指して、本研究を進めたいと考える。

2 主題の意味

「よりよい社会」とは、グローバル化する国際社会において期待される、主体的に向き合い、様々な立場からの調和や、現在だけでなく、これからの未来の社会を考えた『持続可能な社会』、文化や価値観等の違いを理解し、尊重しながら、多様な他者と協働して課題を解決していく『共生社会（共創社会）』のことである。

「よりよい社会を形成していく生き方」とは、上述のような社会の実現をめざし、社会形成に主体的に参画していく資質・能力を身に付けていくことである。具体的には、身近な社会的事象について様々な資料を読み取り、友達との学び合いの中で、社会的事象の見方・考え方を働かせながら社会的事象の意味などを多角的に考え、社会生活の様子や特色などが総合的に分かることである。また、学習して分かった社会生活を基に、社会を見つめ直し、よりよい社会に向けて一人一人が自分の考えをもつことである。

このように、進んで社会的事象に関わり、社会のために自分にできることを考えることで、よりよい社会に生きる自分を実感することができるようになると思う。

これらのことから、北社研では、「よりよい社会を形成していく生き方を創りつづける」子どもの姿を次の3つで捉えている。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 社会生活について理解するとともに、社会的事象について調べまとめる技能を身に付けていく姿(2) 社会的事象の意味などを多角的に考え、社会への関わり方を選択・判断し、適切に表現する姿(3) 主体性をもって、社会に積極的に関わろうとする姿 |
|--|

これらを育成することは、社会科においてその実現を目指す究極的なねらいである「公民としての資質・能力の基礎を育成する」ことにつながると考える。

- (1) 社会生活について理解するとともに、社会的事象について調べまとめる技能を身に付けていく姿

「社会生活についての理解」とは、人々が相互に様々な関わりをもちながら生活を営んでいることを理解するとともに、自らが社会生活に適応し、地域社会や国家の発展に貢献しようとする態度を育てることを目指すものである。

「技能」とは、社会的事象について調べまとめる技能である。具体的には、調査活動や諸資料の活用など手段を考えて問題解決に必要な社会的事象に関する情報を集める技能、集めた情報を「社会的事象の見方・考え方」に沿って読み取る技能、読み取った情報を問題解決に沿ってまとめる技能である。

つまり、社会的事象の見方・考え方を働かせて、社会的事象等の特色や意味、理論などの概念等に関する知識や技能を身に付けていく姿のことである。

- (2) 社会的事象の意味などを多角的に考え、社会への関わり方を選択・判断し、適切に表現する姿

「社会的事象の意味などを多角的に考える」とは、複数の立場や意見を踏まえて考えることである。社会的事象の特色（特徴や傾向など）や相互の関連（つながりや関わりなど）、意味（働きや役割など）について多角的に考える。

「社会への関わり方を選択・判断し、表現する」とは、習得した知識などを基に、自分の意見や考えを選び出して判断し、説明したり、考えたことや選択・判断したことを基に議論したりすることである。

つまり、社会的事象について複数の立場や意見を踏まえて考えたことを基に説明したり、論じたりして表現する姿のことである。

- (3) 主体性をもって、社会に積極的に関わろうとする姿

「主体性をもって、社会に積極的に関わる」とは、自ら進んで社会と関わり、社会の仕組みや働き、社会事象相互の関係・関連、及び人物の行動の価値を追究する姿のことである。このような自らの意志で行動しようとする意欲や態度は、社会性や豊かな人間性、論理的思考力の基礎を形成するものであり、社会を形成していく上で必要な資質であると考えられる。

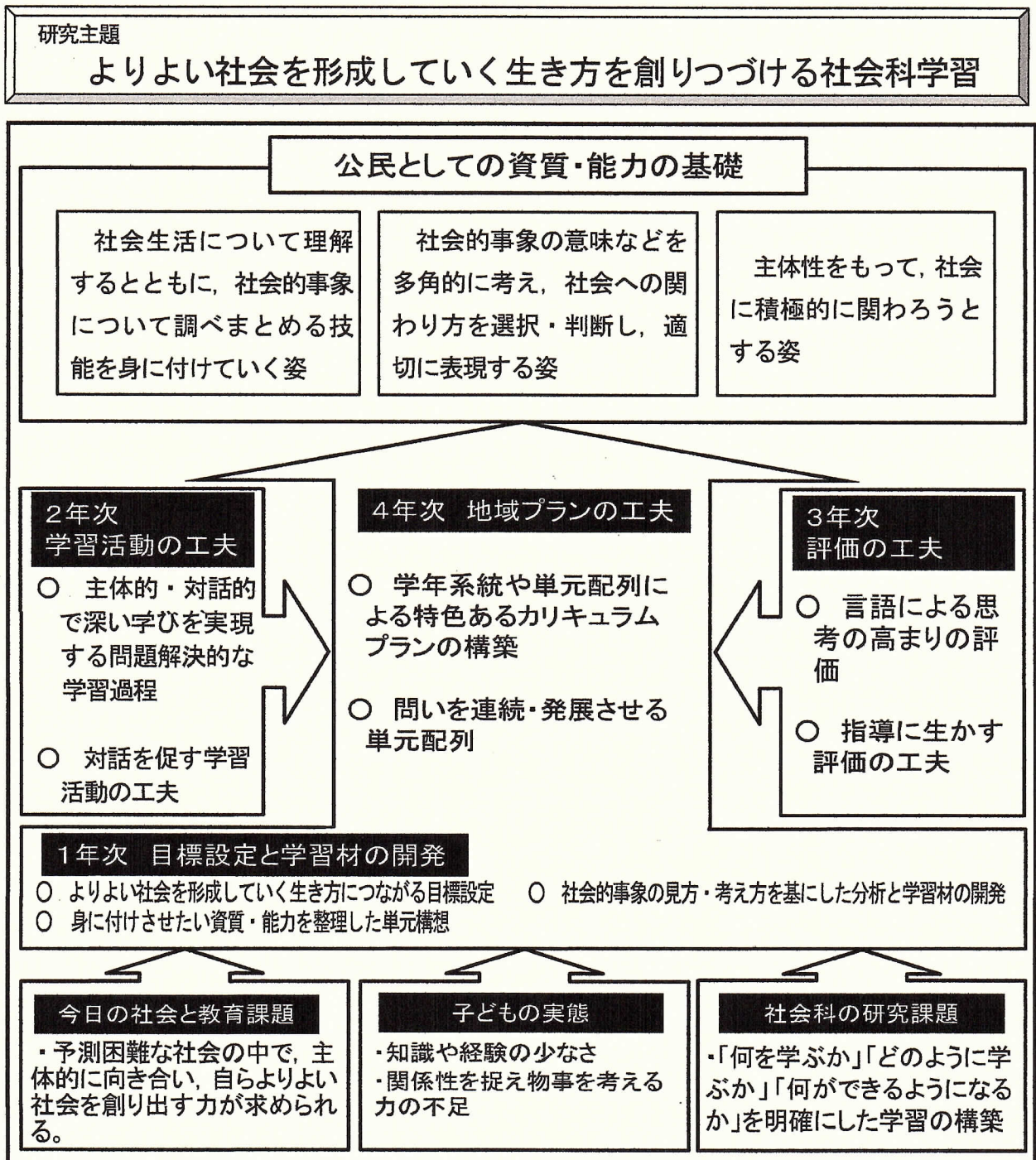
なお、「社会的事象の見方・考え方」については、「位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して（視点）、社会的事象を捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民生活と関連付けたりすること（方法）」として、子どもが「見方・考え方」を働かせる授業づくりの工夫を行う。

3 研究内容

研究主題「よりよい社会を形成していく生き方を創りつづける社会科学習」を推進するにあたり、4カ年計画で、次の研究内容についての実践的研究を行う。

- | | |
|---|---------|
| 1年次 よりよい社会を形成していく生き方を創りつづける社会科学習を構築するための「目標設定と学習材の開発」 | (H29年度) |
| 2年次 よりよい社会を形成していく生き方を創りつづける社会科学習を構築するための「学習活動の工夫」 | (H30年度) |
| 3年次 よりよい社会を形成していく生き方を創りつづける社会科学習を構築するための「評価の工夫」 | (H31年度) |
| 4年次 よりよい社会を形成していく生き方を創りつづける社会科学習を構築するための「地域プランの工夫」 | (H32年度) |

4 研究構想



5 1年次 よりよい社会を形成していく生き方を創りつづける社会科学習を構築するための「目標設定と学習材の開発」

(1) よりよい社会を形成していく生き方につながる目標設定

社会科の授業づくりにおいては、単元のまとまり（単元の授業デザイン）の中で、授業を考えていくこと（本時の授業デザイン）が大切となる。そのためには、まず、学習指導要領の内容を把握して目標設定を行うことが必要である。今後は、新学習指導要領を踏まえ、次の3観点での目標設定を考えている。

- 1 よりよい社会を形成していくための「社会生活についての知識・技能」
- 2 よりよい社会を形成していくための「思考力・判断力・表現力等」
- 3 よりよい社会を形成していくための「主体的に関わろうとする態度」

（なお、現在、移行措置期間であるため、単元の目標表記は、現行の学習指導要領の4観点で示している。）

(2) 社会的事象の見方・考え方を基にした分析と学習材の開発

子どもが対象に主体的に関わりながら追究し、社会認識を広げ深めていくことができるように、単元が地理的内容、歴史的内容、現在社会の内容のどの内容に当たるのかを捉え、社会的事象の見方・考え方を働かせる視点と、その視点を基に生まれる問いや思考を以下のように整理して、学習材を設定する。

見方・考え方を働かせる視点に関わるもの	思考に関わるもの
<p><位置や空間的な広がり> 「どのような場所にあるか。」 「どのように広がっているか。」など、 地理的位置、地形、気候、自然条件などの視点</p> <p><時期や時間の経過> 「いつ始まったのか。」 「どのように変わってきたのか。」など、 起源、変化、発展、継承、持続可能性などの視点</p> <p><事象や人々の相互関係> 「どのようなつながりがあるか。」 「なぜこのような協力が必要か。」など、 工夫、関わり、連携、多様性と共生などの視点</p>	<p>◇比較・分類、総合して社会的事象の特色を考える 「どのような共通点があるのか。」 「どのような仕組みと言えるのか。」</p> <p>◇地域の人々や国民の生活と関連付けて社会的事象の意味を考える 「なぜ必要なのか。」 「どのような役割を果たしているのか。」</p> <p>◇自分の生活や行動について選択したり社会の発展に向けた自分なりの意見をもったりする 「これからはどのように続けていくべきか。」 「自分たちはどのような関わり方ができるのか。」</p>

また、学習材の開発に当たっては、資質・能力を育むことができるように、単元の特質に応じながら、以下の探究性、価値性、発展性の3点を踏まえることとする。

探究性	予想や生活経験からずれや驚きを感じて、「どうして。」「なぜだろう。」「どうすればよいのだろう。」という問題意識をもって調べたくなるものであること。
価値性	社会的事象を追究することで、社会の現状が分かり、社会をよりよくしようとする人々の工夫や努力を捉え、持続可能な社会の形成に参画する素地を育てることができるものであること。
発展性	社会的事象を追究することで、社会の現状が分かり、社会をよりよくしようとする人々の工夫や努力を捉え、持続可能な社会の在り方等のよさや可能性を視点に考えることができるもの。

このように、子どもが「自分事」として問題意識をもって調べたくなるもの、人の生き方・営みや働きが見え、共感的に捉えられるもの、社会の仕組みや現代的な課題（「責任・義務」「継承・発展」「持続可能な取り組み」）等を大切にしながら、よりよい社会を形成していく生き方につながる学習材の開発を行う。

(3) 身に付けさせたい資質・能力を整理した単元構想

学習指導要領を踏まえ、子どもが社会的事象の見方・考え方を働かせながら、身に付けさせたい資質・能力を育むことができるように、子どもが解決をしようとしている問いやその解決に必要な資料、子どもが獲得するであろう認識をあらかじめ想定し、単元構想図を作成する。

第〇学年「単元名」単元構想図（総時数）

1 学習指導要領分析

(1) 学習指導要領の目標

(2) 学習指導要領の内容

2 内容構造図

単元構想図を作成する際は、左図のように、学習指導要領分析と内容構造図を明記する。実際に作成をする際は、次のことに留意する。

単元構想図作成上の留意点

1 学習指導要領の分析について
学年の目標及び内容の2つから行うこと。

2 内容構造図については、次のことを表すこと。

(1) 子どもが解決をしようとしている問い ()

(2) 問いの解決に必要な資料 (・)

(3) 子どもが獲得するであろう認識 ()

<第5学年「自然条件と人々の暮らし」単元構想図（8時間）>

(1) 学習指導要領の目標

我が国の国土の様子、国土の環境と国民生活との関連について理解できるようにし、環境の保全や自然災害の防止の重要性について関心を深め、国土に対する愛情を育てるようにする。<第5学年目標(1)解説書 P48 より>

(2) 学習指導要領の内容

我が国の国土の自然などの様子について、次のことを地図や地球儀、資料などを活用して調べ、国土の環境が人々の生活や産業と密接な関連をもっていることを考えるようにする。<第5学年内容(1)解説書 P51 より>

ア 世界の主な大陸と海洋、主な国の名称と位置、我が国の位置と領土

イ 国土の地形や気候の概要、自然条件から見て特色ある地域の人々の生活

ウ 公害から国民の健康や生活環境を守ることの大切さ

エ 国土の保全などのための森林資源の働き及び自然災害の防止

<つかむ>

1 写真を基に自然条件に特色のある地域の暮らしや産業の様子について話し合う。①

あたたかい地域(沖縄県) ・美しい青い海 ・海開きの様子 ・那覇市の平均気温	寒い地域(北海道) ・流水が見える海 ・スキーを楽しむ人々 ・札幌市の平均気温	高地(長野県・野辺山原) ・航空写真 ・キャベツ作りの様子 ・野辺山原の土地の高さ	低地(新潟県・白根郷) ・航空写真 ・もも作りの様子 ・白根郷の土地の高さ
--	---	---	---

【学習問題】気候や地形に特色のある地域では、人々の暮らしや産業にどのような工夫があるのだろう。

<さぐる・まとめる>

2 沖縄県の人々の暮らしや産業の特色や工夫などについて調べ、話し合う。③

【問い】沖縄県では、人々の暮らしや産業にどのような工夫があるのだろう。

気候に合わせた暮らし方の工夫
・沖縄県と北九州市の雨温図 など

気候を生かした産業の工夫
・沖縄県の作付面積 ・小菊出荷量ランキング
・小菊の市場取引数 など

【問い】なぜ、沖縄県には、ハワイを超えるほどのたくさんの観光客が集まるのだろう。

自然環境・文化・歴史・人々の願い
・伝統文化 ・土地利用地図 など

沖縄県では、気候に合わせて生活したり、気候を生かして産業を営んだりしている。沖縄県の人々の生活や産業、文化は、自然環境と密接に結びついている。

3 野辺山原の人々の暮らしや産業の特色や工夫などについて調べ、話し合う。③

【問い】野辺山原では、人々の暮らしや産業にどのような工夫があるのだろう。

気候に合わせた暮らし方の工夫
・野辺山原と北九州市の雨温図 など

気候を生かした産業の工夫
・野辺山原の作付面積 ・土地利用地図
・野菜づくりカレンダー など

【問い】なぜ、野辺山原は、高原野菜の生産地として有名になれたのだろう。

歴史・人々の努力
・開拓前後の写真 ・農家の人の話 など

野辺山原では、夏でもすずしい高地の気候を観光や農業、酪農などに生かしている。野辺山原の人々の生活や産業、文化は、自然環境と密接に結びついている。

<いかす>

4 地形や気候に特色のある地域の自然の様子や人々の暮らしの様子を新聞にまとめる。①

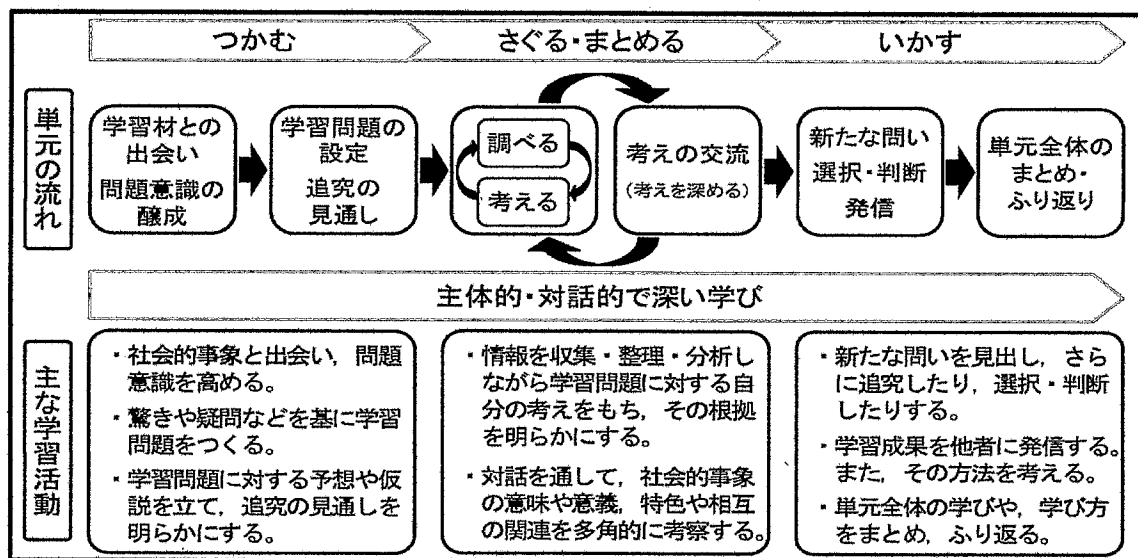
【問い】他の地域では、自然環境と人々の暮らしや産業は、どのようにかかわっているのだろう。

日本では、それぞれの地域の気候や地形などに合わせて生活したり、それを生かして産業を営んだりしている。国土の環境は、人々の生活や産業と密接な関連をもっている。

(1) 主体的・対話的で深い学びを実現する問題解決的な学習過程

子どもの主体的・対話的で深い学びを実現することができるように、子どもが問題解決的に学習を進めるプロセス（学習過程）の基本パターンを「つかむ → さぐる・まとめる → いかす」のように設定する。それぞれの学習過程では、以下のような主な学習活動を設定する。本大会では、主体的・対話的で深い学びを実現させる学習活動の工夫として、特に対話的な学びに注目し、研究を進めていくこととする。

＜主体的・対話的で深い学びを実現する問題解決的な学習過程＞



なお、つかむ段階で、複数の問いを無理につなげた学習問題を設定してしまうと、子どもの問題意識の醸成がなされにくく、いかす段階まで見通すことが難しくなる。よって、1単元1学習問題を基本形としながら、これを柔軟に捉え、いかす段階において、これまでの学習を問い直したり、社会への関わり方を問うたりする「新たな問い」（発展的な発問として、あるいは、学習問題②となる場合もある）を設定する。

(2) 対話を促す学習活動の工夫

対話には、調べる対象を基にした自己との対話、他者（子ども・教師）との対話の方向性がある。特に、子ども同士の対話は、自分の考えとは異なる他者の考えと交流し合うことを通して、一人で考えるよりも多様な視点から社会的事象を捉え直したり、そのことを基に、選択・判断できるようになったりするところによさがある。このことは、「自分の考えをもつ[思考・判断]」と「説明したり議論したりする[表現]」とを何度も往復する中で、思考力・判断力・表現力等を高めていくことにつながる。

子ども同士の対話が成立するようにするためには、「何をどのように話し合い、考察すればよいのか」という想定を十分におこななければならない。子どもの対話を促すことができるように、教師が「問い」「資料」「話し合いの方法」等について吟味し、以下の2つの工夫を行う。

① 問いの焦点化の工夫

社会的事象に出会った子どもは、たくさんの問いをもつ。しかし、漠然とした問いでは、子どもの対話は生じにくく、深い学びは実現されない。「問いの焦点化」とは、一単位時間の中で、あるいは単元展開の中で、追究する対象や考える方向性がはっきりとした問いに絞り込むことである。そうすることによって、

- ・自分の意見や考えをもちやすくなる
- ・意見や考えが分かれた時にやりとり（対話）が生まれやすくなる

といった深い学びにつながる効果が考えられる。

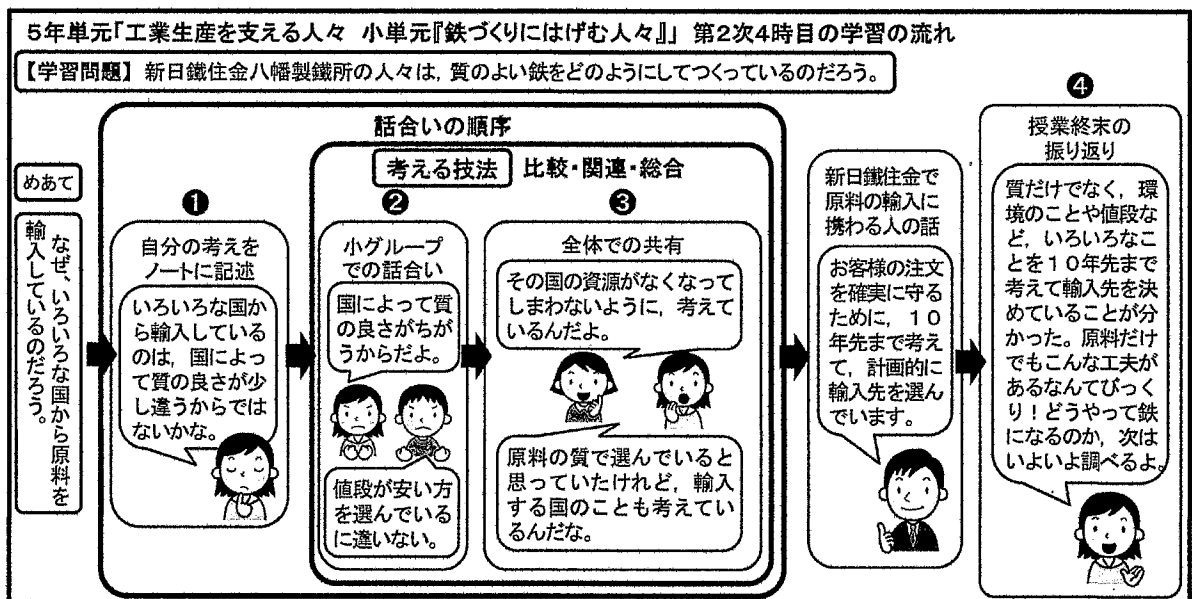
焦点化された問いとしては、「～であるのに、なぜ、わざわざ～なのだろう」「いったいどうやって」といった考察のための問いや、「どちらがよい方法か」「本当に～でよいのだろうか」「何を優先するべきか」といった構想のための問いが想定される。

「問いの焦点化の工夫」とは、資料の加工・提示の仕方と発問を工夫することである。具体的には以下のような工夫が考えられる。

- ・資料の一部を拡大したり、隠したりするなどの加工を施す。
- ・新たな視点を生み出す資料を提示する。
- ・資料を提示する際に、既有的認識を揺さぶる発問をする。
- ・子どもの発言に対して、資料の着目した部分や、子どもの反応の理由を問う。
- ・子どもと子どもの発言のずれや立場の違いを明確にする。

② 話し合い活動の工夫

「話し合い活動の工夫」とは、子どもが焦点化された問いに対して考えをもつことができるように、話し合いの順序や形態、グループ編成の仕方を意図的に計画したり、話し合いの中で思考を可視化・操作化することができるように手立てを講じたりすることである。話し合い活動を活性化するための具体的な手立てとして、次のようなものが考えられる。



<一単位時間の話合い活動の基本的な流れ>

① 自分の考えをつくるための手立て

自分の考えをつくることができるように、必ず根拠となる資料を基に考えを書くように指導する。自分の考えをつくるのが苦手な子どもに対しては、例えば「この人は何をしていますのしょう」「この人は何を考えているのしょう」「どうしてこのようなことが起きたのしょう」などと、資料のある部分に目を向けさせるなどの声掛けをし、ノートに記述することを促していく。

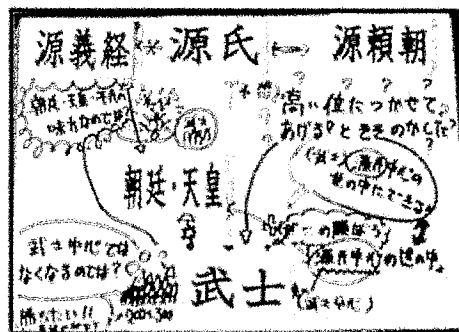
② 思考の可視化・操作化の手立て

話し合い活動の際、思考の可視化・操作化を図ることで、対話が活性化し、子どもが多様な考えを交流しながら互いの考えを深めていくことができると考えられる。そこで、互いが思考・判断したことをホワイトボード等に可視化しながら小グループで話し合う活動を仕組む。小グループによる話し合いには、「情報を整理・分類・集約する」「複数の結論を順位付ける」「根拠を増やし、視野を広げる」「質疑を通して互いの考えを確かにする」といった機能がある。考えの根拠が議論の中心になるように、相手の考えに対立したり、共感したりして話し合うようにすることが大切である。

思考を可視化・操作化するものとして、思考ツール（考える技法）やキーワードカード、付箋等の活用が考えられる。これらの手立てにより、「比較する」「関連付ける」「総合する」など、根拠に基づいた子どもの思考を活性化することをねらう。思考ツールには、コンセプトマップ、ウェビングマップ、クラゲチャートなど、思考の型によってさまざまなバリエーションがあるが、思考ツールに縛られすぎないように学習を構成する必要がある。

【例】キーワードカードの活用

「キーワードカードの活用」とは、教師があらかじめ単元におけるキーワード（工程・出来事・人物など）をカードにし、それを対話に活用することである。具体的には、ホワイトボード上でキーワードカードを並び替えたり、線で結んだりするとともに、そのように並べたり線で結んだりした根拠や新たに見出した問いなどを書き込むことが考えられる。対話で用いるキーワードカードは、子どもが自由に選択する場合や、教師が意図的に限定する場合が想定される。これにより、複数の情報や事実を関連付けながら、社会的事象の特色や意味を多角的に考えることができるようにする。



③ 全体での交流の手立て

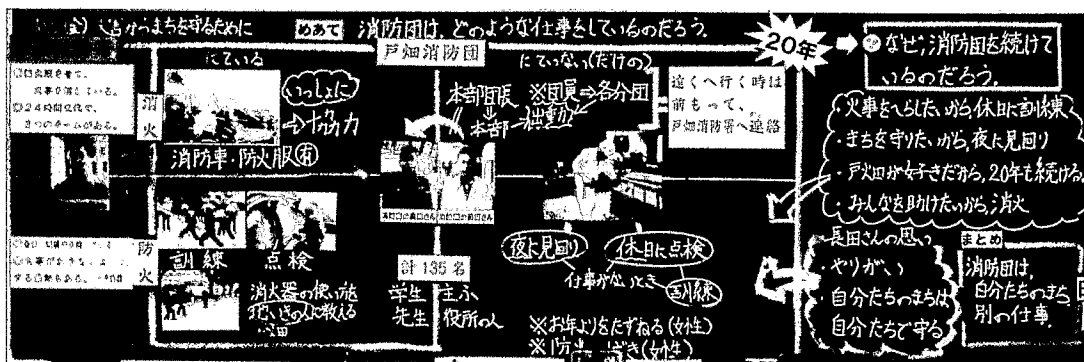
全体での交流を行うに当たっては、「グループの意見」の出し合いではなく、「グループで話し合った結果としての自分の考え」を交流し合うようにする。また、子どもの考えを適切に見取り、共通する考えや異なる考えを効果的につなげることができるように、計画的な机間指導とそれに基づく意図的指名を行うようにする。

【問い返し・揺さぶり】

子どもが考えを発言した際には、「どうしてそう考えたの?」と根拠を問い返したり、「例えば?」「つまり?」と具体化や一般化を図るようにしたりする。状況に応じて、新たな視点を生み出す資料を提示したり、「本当に?」「それなら〇〇の方がよいのでは?」などと問いかけたりして揺さぶりをかけ、事実を基に反論させることも考えられる。このように、全体での交流における教師の出番を適切に捉え、意図的指名や問い返し、発問を行っていくことが大切である。

【構造的な板書】

子どもの考えを構造的に板書の中に位置付けることで、対立軸や新たな問いを生み出し、事実や子どもの考えを比較・関連・総合していくことで、さらなる対話へと促すことができる。以下の資料のように、消防署の仕事と、まちの消防団の仕事についての子どもの考えを、ベン図のように構造的に板書することで、子どもは二つの立場を比較・関連して考え、「(普段仕事をしていて大変なのに)なぜ消防団の仕事を続けているのだろう」という新たな問いを見出し、さらなる対話へと向かう。



<第4学年「災害からまちを守るために」8時目の板書>

④ 自分の考えを見直す手立て

小グループや学級全体での交流の後、小グループで話し合ったホワイトボードや、学級全体での話し合いをまとめた板書を基に、はじめの自分の考えを見直し、加筆・修正するようにする。このことで、自己との対話や他者との対話をより促すことができる。と考えられる。

まとめと振り返りについては、めあてに立ち返り、自分なりの結論や考えの変容、次時に向けた問い、本時の学び方などについて記述する。単元の最後には、単元を通して深まった自分の考えや単元全体の学び方、今後調べたいことなどについて振り返るようにする。